

「東アフリカ沿岸地域経済圏」とグジャラート商人

藍澤 光晴

La zone économique sur la côte d’afrique de l’est et Les communautés commerçantes d’origine goudjarati

Mitsuharu AIZAWA

Dans cet article, j’éclaircirai les activités économiques des communautés commerçantes d’origine indienne dans *la zone économique sur la côte d’afrique de l’est* avant de tailler en petites pièces par les puissances occidentales.

La communauté indienne est présente à Madagascar depuis presque deux siècles. Elle représente 0.2% de la population. Il est quasi-impossible de trouver le recensement de cette communauté minoritaire. Toutefois, actuellement le nombre des indiens présents à Madagascar est à peu près de 40,000 dont 2.500 à 3,000 ayant des passeports indiens et 30,000 à 40,000 titulaires des passeports malgaches et français (un bon nombre sont des doubles nationalités), d’après le renseignement obtenu à l’Ambassade de l’Inde. On remarque que très peu ont une nationalité malgache et les indiennes pour cela depuis un certain temps.

D’après l’histoire, ces indiens sont des descendants des commerçants de l’État de Goujarat, situé au nord-ouest de l’Inde, au 19^{ème} siècle. Ils sont très habiles, très économes et travailleurs. De plus, ils s’entaient mutuellement – bien que ça a un peu changé dernièrement – en créant des fonds de développement pour ceux qui sont financièrement en difficulté. Et enfin, ils ne se contentent pas des bénéfices mais ils investissent beaucoup pour élargir leurs champs d’action. Ce sont des vrais hommes d’affaires et des vrais battants.

Malgré le fait que les données statistiques sur les activités économiques des indiens ne sont pas disponibles pour le moment, les secteurs d’activités dans lesquels ils opèrent et les noms des quelques entreprises qu’ils possèdent parlent d’eux-même sur leur grande influence dans l’économie de Madagascar.

1. はじめにー「東アフリカ沿岸地域経済圏」の歴史的概観ー

マダガスカル在住のインド系ムスリムであるコージャ Khoja は、マダガスカル島に初めて移住してきた状況を、以下のように語り継いでいる¹。

1865年にザンジバルからヌシ・ベ Nosy-Bé にきたシェリフ・ジヴァ・スルティ Sherif Jiva Sourti²、モロウ・カンジェー Molou Kanjee、アリバイ・タワール Alibhay Tahwar の3人が、マダガスカルにきた最初のコージャだ。とく

に、アリバイ・タワール（ザンジバル生まれ）は、ザンジバルで金物やその他の商品一般を扱う商人、いわゆる金物屋 *Quincaillerie* として成功しており、さらなる販路拡大のためにマダガスカルに新たな拠点を築くために、「港でのカウンター業務係 *Comptoir*（仲買人・卸業者）」としてやってきた。その後彼は、ザンジバル、グジャラートとマダガスカル間の取引に従事し、ヌシ・ベの他にマジュンガ Majunga、メンティラヌ Maintirano、スアララ Soalala、ムルンダヴァ Morondava、ベルー Belo、チュレアール Tuléar へ、インドやザンジバルから持ってきた商品を卸すための、商店を次々と設立した。これらの商店には、彼の親戚

¹ ロッシャン・ジャミール氏による聞き取りより（2007年8月18日、アンタナナリヴ市内のマドラサの校長室にて）。

² なお再移住先での活動については、Charifou-Jewa の名前で、「昔からディエゴ・スアレスで食料品、織物 *tissus* やインドから輸入された商品を小売する商店を運営していた」[*Guides Annuaire de Madagascar 1908* : 326] と記録されている。

をインドやザンジバルから呼び寄せて派遣した。1870年、義弟カミス・スマ Khamis Souma を、グジャラートのラナヴァヴからヌシ・ベに呼び寄せ、その後ムルンダヴァ、ベルー Bélo の支店長として派遣した。カミス・スマは現在のマドラサ校長モハメッド・ラーザ・カミス氏の祖父である。またアリバイ・タワーは、敬虔な十二イマームシーア派の信者であり、1870年ヌシ・ベにマダガスカルで最初の十二イマームシーア派のモスクを建設した。

筆者は、マダガスカルにおけるインド亜大陸西域グジャラート Gujarat 地方出身のグジャラート商人の社会経済活動の歴史について描写してきた。

19世紀から多くのグジャラート商人が、ザンジバルやグジャラート地方から商業活動のためにマダガスカルへ移住し始め、フランスの植民地支配がマダガスカルにおいて進む過程で、宗主国フランスと連携しつつ経済規模の拡大に成功したことを描写してきた [藍澤 2016 : 223-237]。その結果 1960年フランスから独立したマダガスカルですでに確固たる経済的地位を築いていたことを明らかにした [藍澤 2010 : 135-148]。

そこで本研究では、15世紀末のポルトガルによる環インド洋交易への侵入以降から、19世紀のイギリス支配が東アフリカ沿岸地域で確立し始める時期まで、グジャラート商人が、重要な存在であり続けたことを説明する。なぜなら、19世紀のマダガスカルへのグジャラート商人の移住は、東アフリカ沿岸地域、さらに環インド洋経済圏における政治・経済状況を射程に考察しなければ理解できないからである。

15世紀末から、ポルトガルによる環インド洋世界への侵入は、それ以前、すなわちグジャラート商人が、東アフリカ沿岸地域で展開していた商業ネットワークに大きな

打撃を与えた。近代以前、キルワ Kilwa を中心に繁栄していた東アフリカ沿岸地域の海洋都市国家群 City-States は、ポルトガルによって大きなダメージを受けたのである。

しかし、ポルトガルのアジア支配は、おもにグジャラート商人からもたらされる関税によって支えられていた。ポルトガルの環インド洋経済圏の支配の確立とグジャラート商人による交易の繁栄は、コインの表と裏の関係にあったのである。

ポルトガルの後にオマーン王が、東アフリカ沿岸地域において覇権を握るのだが、しかしオマーン王の経済的基盤も、やはりグジャラート商人によって支えられており、グジャラート商人の経済活動は、より一層の繁栄の時期に入った。イギリスの支配が強まりつつあった 19世紀中葉以降も、グジャラート商人の経済活動は活発化していた。

13世紀から 14世紀にかけての環インド洋文明圏の基本構造は、ポルトガルが本格的に進出する 16世紀初頭まで、大きく変わらなかった。

それでは、インド洋世界の西部に位置する東アフリカ沿岸地域の歴史的概念を、以下先行研究をレビューしながら照射する。

ジャネット・L・アブー＝ルゴドの『ヨーロッパ覇権以前』 [Abu-Lughod 1989 ; 佐藤他訳 2001] は、13世紀以前から 16世紀にかけての環インド洋文明圏を考察する際、きわめて重要な文献である。アブー＝ルゴドによれば、「世界システム」は、ウォーラステインやブローデルが主張するより、はるか以前から、つまり遅くとも 13世紀後半には、すでに完成しており、16世紀までヨーロッパ勢力は、このシステムに加わるきわめて小さな参加者にすぎなかったことが理解できる。このシステムには、覇権勢力は存在しておらず、複数の「中核」が存在しており、それぞれが緩やかな「国際関係」を築いていた点に特徴がある。さらにフランクは、環インド洋圏を、アブー＝ルゴドとチャウデュリ [Chaudhuri 1990] を引用しつつ、13世紀には、単一のアフロ＝ユーラシア世界システムとして存在しており、そのなかは、互いにリンクした八つの都市中心的地域が統合されており、この相互にリンクした八つの地域は、互いに関係づけられ、さらにかみ合わされた三つのサブシステムに分けることができる [フランク 2000 : 134] と述べている。

図2は、環インド洋³文明圏の三つのサブシステムを図式化したのである。

回路 I で活動していたのは、おもにイスラム商人とヒンドゥーの船主であり、グジャラート商人の活躍する東アフリカ沿岸地域であり、本研究でもおもに考察する経済圏である。

さらに、回路 I の東アフリカ沿岸地域は、バントゥー諸語を基盤にインド・アラブ文化の発展、象牙や奴隷交易の発達、グジャラート商人の活躍などの共通の基盤が見られ、1250年から 1500年前後まで、とくに繁栄していた。現在のソマリアにあたるモガディシュー Mogadishu から現在のモザンビークのソファアラ Sofala までの約 2,000 マイルにおよび、いくつかの都市国家が存在していた。

回路 I の東アフリカ沿岸地域との交易は、季節風とい



図1 マダガスカルのおもな民族と地名
筆者作成

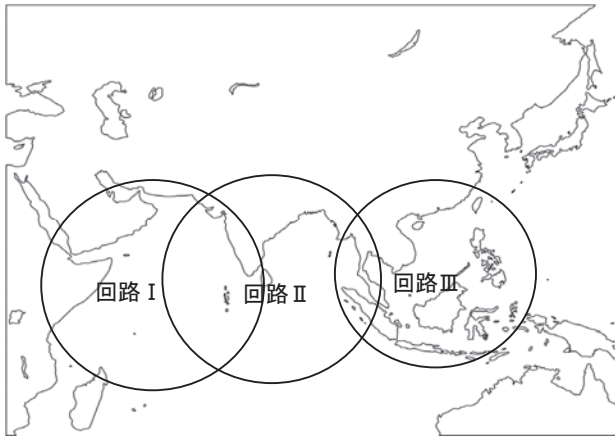


図2 環インド洋圏の三つの回路と東アフリカ沿岸地域経済圏
(出所) アブー・エルゴド、佐藤他訳『ヨーロッパ覇権以前(下)』岩波書店、2001年、p.51. より作成。

う自然環境によって支えられていた。11月初旬から3月にかけて、インド・ペルシャ湾からマダガスカルに至るまで、北東からのモンスーンが吹き、逆に4月から9月にかけて、東部アフリカからインドやペルシャ湾方向にモンスーンが吹き、年間を通じて異なる風向きのモンスーンが、東アフリカ沿岸部とインド亜大陸を結びつけていた。25日足らずで、2,200マイルもの距離をダウ船⁴で航海が可能であり[Nicholls 1971: 74]、筆者がかつてマダガスカルでインタビューしたアスガール・バルダイ氏 Asgar Barday によると、風が強ければ、早くても3週間、遅くても2ヶ月でチュレアル Tuléar とグジャラートのポルバンダル Porbandar を結んでいたという。

家島は、ダウ船によるインド洋海域ネットワークが、7世紀から8世紀には、ペルシャ湾岸からアラビア海はもとより、東アフリカ沿岸地域から東は中国の光州や揚州の諸港にまで拡大していたと説明している[家島 1992: 45]。さらに、イスラム教の成立と拡大が、ムスリムによるインド洋沿岸地域間⁵、とくに14世紀までにはインド洋世界西部地域の交易の活性化を促した。要するに、東アフリカ沿岸地域では、15世紀末に、ポルトガルが進入する以前から、

季節風による自然現象に大きく依存した海上交易が、2000年にもおよぶ長期の歴史を持つネットワークが形成されていたのである[Abu-Lughod 1989: 251-253; 家島 2006: 102-103]。

このように自然環境に大きく依存した環インド経済圏に関して長島は、グジャラートのカンバヤ Cambay を中心に、西は地中海へと繋がるアデン Aden、東はマラッカ Malacca からなる貿易中心港 entrepot が、それぞれいくつかの周辺を抱えていたと分析している。とくに、アデン＝カンバヤ間の航路は商業的に重要で、これらの地域ではムスリム商人がおもに活躍しており、東アフリカ沿岸地域から金、象牙、奴隷を、さらにアデンやその周辺地域からの馬をカンバヤに輸送し、カンバヤからは綿布、ガラス玉(ビーズ、彩色ガラス)、藍、真珠、コーチンの周辺からの胡椒、マラッカから運ばれてきたクロブ、米、小麦、白檀などを持ち帰った。環インド洋交易で、とくに重要な商品が織物であり、とりわけブルーの綿織物(藍染綿布)、米、胡椒や馬であったと詳細に述べている[長島 1976]。

さらにピアソンは、環インド洋交易で中心的な役割を担っていたのは、グジャラート商人であり、とくにアデン＝グジャラート＝マラッカという環インド洋交易の大動脈では、グジャラートのインドムスリムの活躍が目立っていたと指摘した[Pearson 1976: 10-14]。東アフリカ沿岸地域にまで、グジャラート商人は、良質なインド産織物を携えて交易に従事しており、環インド経済圏における交易、とくに東アフリカ沿岸地域の交易は、おもにグジャラート商人によって支えられていたのである。

そもそもバントゥー系諸語を基層にアラブ・インド文化が融合した東アフリカ沿岸地域は、ロビンソンによれば、1250年から1500年前後まで、とくに繁栄しており、現在のソマリアにあたるモガディシュから現在のモザンビークのソファールまでの約2,000マイルにおよび、いくつかの都市国家が存在していたという[Robinson 2004: 32-33]。

具体的に吉国は、12世紀にキルワを中心に成立したイスラム王朝であるシラーズ朝は、ザンベジ Zambezi 川上流(グレートジバブエ Great Zimbabwe)で、採掘された金や

³「地理学上のインド洋は、インド亜大陸が大きく南に突き出ていることによって、東側のインド洋(ベンガル湾を中心とする)と西側のインド洋(ペルシャ湾、紅海、アラビア海を含む)に分かれる。その東側を区分するマライ半島、スマトラ島、スンダ列島から、西側を区分するアフリカ大陸まで6,000～9,000キロの隔りがあり、南側は南極大陸までの限りなく広大な海洋がつづく。マダガスカルとスリランカの大島、ソコトラ、コモル(コモロ)、セーシェル、モーリシャス、マルディヴ、ラッカディヴ(ラクシャディーバ)、ニコバル、アンダマンなどの島嶼群をのぞいて、全般的に島は少ない。一方、歴史的世界としてのインド洋は、以上の海域に加えて太平洋の附属海としての南シナ海、ジャワ海、スルー海、セレベス海とバンダ海などの東南アジア島嶼部と南中国にまたがる海域が含まれる[家島 1993: 11-12]。またトメ・ピレスによると「とくにカンバヤは二本の腕をのぼし、右手でアデンを握り、一方の手でマラカを握っている」と形容されるほど重要な港であった[ピレス、生田他訳 1966: 114]。

⁴ダウ船についての詳細な記述は、[家島 1990]を参照のこと。英語でダウと一般に称されている木造帆船は、本来は船種ごとに名称が異なっている。また、グジャラートでも木造帆船の製造が盛んであった。現在でも、湾岸アラビア諸国の造船所では、グジャラート出身のイスラム教徒が働いているという。

⁵イスラム商人による環インド洋での交易は、環インド洋地域の多くを、イスラム教へと変えていった。マダガスカルへのイスラム教のさまざまな影響についての研究としては、[Dez 1967: 1-38]を参照のこと。なお、マダガスカル沿岸部の人びとには、現在も豚肉を食することへの禁忌や暦へのイスラム教の影響が見受けられる。

象牙を独占的に輸出する強力な都市国家として成長した様子を描写している [吉国 1999]。

13世紀には、アデンからマダガスカルまでのモンスーン航海が、一回の航海で結ばれるようになると、東アフリカ沿岸地域は、より活発な「域内」交易で繁栄していた [家島 1993 : 328-344]。ポルトガルによる本格的な侵入以前、東アフリカ沿岸地域は、バントゥー諸語を基盤にインド・アラブ文化の発展、象牙や奴隷交易の発達、グジャラート商人の活躍などの共通の基盤が見られた [Bouchon and Lombard 1987 : 56]。さらに、いくつかの都市国家がゆるやかに結ばれ、「東アフリカ沿岸地域経済圏」を形成していたのである。

以上が、西洋列強による本格的な支配が始まる以前の東アフリカ沿岸地域経済圏、ひいては環インド洋経済圏の基本構造であるが、ポルトガルが本格的に進出する16世紀初頭まで、この基本構造は大きく変わらなかった。なぜならば、環インド洋経済圏は、外来の商人や船舶に対して開放的で、取引は友好的に行われており [家島 2006 : 398]、参加者の一人がシステム全体を支配するようなことはなく、すべての参加者は、共存 co-existence していたからである [Abu-Lughod 1989 : 361-362]。

本稿では、第一に環インド洋世界の歴史を明らかにし、第二に東アフリカ沿岸地域におけるグジャラート商人の役割を描き、第三にマダガスカルを含めた東アフリカ沿岸地域は、おもにグジャラート商人によって支えられていたことを明らかにする。そこで具体的には、先行研究で描写されている歴史的概念としての東アフリカ沿岸地域経済圏が、西洋列強により支配を受けつつある過程におけるグジャラート商人の経済活動について描写する。

2. グジャラート商人と東アフリカ沿岸地域経済圏—ザンジバルの台頭と東アフリカ沿岸地域経済圏の再編—

2.1 グジャラート商人とポルトガル

グジャラート商人は、西洋列強の進出以前、東アフリカの金や象牙とグジャラート産の綿布やガラス玉の交易に従事していた [Alpers 1976 : 24]。

グジャラート商人は、おもにヒンドゥーのパニアン Banian⁶ と十二イマームシーア派のコージャ Khoja から構成されている。コージャは、内陸のプランテーション経営者であるオマーン＝アラブ人と貿易商のパニアンとその間を仲介するロハナ Lohana のジャーティ jati に由来する「港でのカウンター業務係 Comptoir (仲買人・卸業者)」として経済活動に従事していた [藍澤 2010 : 136]。グジャラート商人は、それぞれ環インド洋交易において、仲買人・卸業者＝コージャ、輸出入業者＝パニアンの協力関係によって成立していたのである。また、コージャは、金融業者でもあったパニアンから融資された前借金を携え、港で商品の仕入れと卸業に従事し [Landen 1967 : 142]、経済的にも、ジャーティでも、パニアンより下位に位置づけられて

いた。

このような棲み分けのもとグジャラート商人の積極的な活動により、モザンビーク＝グジャラート間の交易の規模は、1639年10月期のグジャラートのディウ Diu からモザンビークへは、インド産の布 24万 kg (1000バレル)、モザンビークからは、象牙 11万 3400ルピー⁷分に上っていた [Pearson 1998 : 242-243]。

一方、14世紀には、マダガスカルにおける東アフリカ沿岸地域における交易の拠点としては、ムスリム化した北西部のマジュンガ Majunga とヴヘマール Vohémar がすでに発展していた。また、1500年までにはマダガスカルとコモロ諸島 Comoros は、キルワに米や凍石製の壺などを供給する周縁地域として発展していた [Newitt 1987 : 206]。その交易に従事していた北西アフリカのムーア人であり、マダガスカルにおいても見られていた [Vérin 1976 : 73-82] という。

16世紀まで、東アフリカ沿岸地域経済圏は、環インド洋経済圏においてとりわけて経済的に重要な地位を占めていたわけではなかった。エドワード・オルペアーズの試算によると、ポルトガルが、環インド洋経済圏へ介入し始めた15世紀末、グジャラートから東アフリカ沿岸地域向けの輸出は、環インド洋交易の全体の約4%にすぎなかった [Alpers 1976 : 22-44] という。それにもかかわらず、地理的に東アフリカ沿岸地域は、ポルトガルやそれ以降のイギリスとフランスなどのヨーロッパ勢力にとって、アジアへと続く重要なルート上にあることは否定できないだろう。

東アフリカ沿岸地域経済圏は、15世紀中葉になるとキルワの政治・経済力に翳りが見え始めた上に、モンバサ Mombassa やモガディシュ Mogadishu などの都市国家間の対立などが重なった [家島 1993 : 340]。まさにその混乱に乗じ、ポルトガルは東アフリカ沿岸地域の都市国家群を占領した。キルワやモンバサなどは、1505年にポルトガルの海軍力のまえに占領を許したのである [マトベイエフ 1992 : 694]。とくに、キルワは徹底的に破壊された。その後、ポルトガルは、1507年、ホルムズ Hormuz とソコトラ Socotra、1509年には、グジャラートのディウと次々に侵略し、東アフリカ沿岸地域においてゆるやかに結ばれていた海洋都市国家群は崩壊した。環インド洋文明圏は、ポルトガルのアジア帝国である、いわゆる「インドシア州 Estado da India」⁸の形成を許したのである。

なお、ポルトガルがグジャラートのディウを比較的容易に攻略できたのは、以下のような理由である。「グジャラート国王がバッセインやディウをポルトガルに割譲したのは、グジャラート船の航海の安全の確保のためと、ムガル皇帝フマーユーンの攻撃からの防御のためにポルトガルの援助を得るため」であり、またグジャラート商人は、「ヨーロッパ船の海軍力の圧倒的優越を認識していた」ためである [長島 1984 : 92-93]。

⁶ パニアンは「ソーニー Soni」というジャーティに属する集団である。

⁷ ピアソンは、1ルピー＝200リアル(ポルトガル)としており、さらに当時の1ルピーは、現在の4米ドル(1970年現在)に相当すると試算している [ピアソン 1984 : iv - v]。つまり当時の1ルピーは、1440円(1970年現在)と考えられる。

しかしながら、ポルトガルの植民地支配にもかかわらず、グジャラート商人の活動が衰退することはなかった。福田によると、ポルトガルは、当初グジャラートなどの在地商人の交易活動に軍事攻撃を仕掛けたが、ポルトガルの海洋支配を認めた在地商人が関税を払い、香辛料や武器の原料となる鉄などを運ばないなどとした条件を守れば、交易を行うことを許可した。さらに、このような規制も時間の経過とともに次第に緩くなり、17世紀には、再びグジャラート商人による取引量は増加に転じた〔福田 2000 : 118-119〕。

一方、17世紀の東アフリカ沿岸地域経済圏では、ポルトガルによるザンベジ川上流のテテ Tete での金採掘活動が活発化していた。ちなみに、ザンベジ川上流で採掘された金輸出量は、1585年に574kg、1591年に716kg、17世紀には1tを超え、次第にその採掘量は増加した〔増田 1998 : 490〕。16世紀のヨーロッパ諸国は、12万tから15万tの香料を輸入していたが、その対価として、アフリカから収奪した150tの金で支払った〔ウォーラーズテイン 1981 : 267〕という。つまり、ヨーロッパがアフリカで採掘した金は、アジア産の香料の対価として、アジアに飲み込まれていたのである。

そればかりか、ポルトガルの金採掘のための活動資金や「インディア州」の維持費は、おもに、グジャラート商人からもたらされる関税によって賄われていた。

グジャラートの関税収入は、グジャラート商人が16世紀中葉よりポルトガルとの関係を強化し、おもにグジャラートやゴア＝モザンビーク間での綿布と象牙の交易によって、もたらされたものであった。ポルトガルは、東アフリカ沿岸地域＝グジャラート、ゴア間の交易を支配しようと試みたが、グジャラート商人の交易活動のまえに、後退して行くことになった。つまり、ポルトガルのテテでの金採掘の資本と「インディア州」の維持費は、グジャラート商人の東アフリカ沿岸地域経済圏での交易から得られる関税収入に大きく依存していたのである。

グジャラートの関税収入だけで、アジアにおけるポルトガルのアジア帝国が絶頂にあった1586年から1587年にかけて、グジャラートでの関税収入を除くアジア帝国の歳入全体のほぼ3倍近くに達していた〔ピアスン 1984 : 176〕。したがって、グジャラートからの関税収入のために、ポルトガルは、グジャラート商人に対し、東アフリカ沿岸地域＝グジャラート間の交易の独占を容認せざるをえなかった。事実、1686年、モザンビークのポルトガル人長官は貿易権独占を放棄し、グジャラート産綿布の輸入権が、結果としてグジャラート商人に売却されることになったのである。

グジャラート商人が、環インド洋世界各地で世界商品として、グジャラート産綿布の販売を可能にしたのは、17世紀のグジャラートにおいて商品経済が発展しており、グジャラート商人による商業・金融組織も確立されており、遠隔地送金的手段として手形制度が、すでに発達していたからである〔小谷 1969 : 197-226〕。

18世紀初頭まで、東アフリカ沿岸地域経済圏におけるグジャラート商人の経済活動は、再び活発になっていた〔Pearson 1998 : 227-249〕。ポルトガルは、環インド洋を完全に掌握できずに、17世紀には急速にその勢力を衰退させていった。ポルトガルにとって、インド洋を支配するにはあまりにも広すぎた。その最盛期といわれる16世紀後半にさえ、植民地支配は十分に貫徹しえず、既存のグジャラート商人などの商業ネットワークの統制に失敗し、その後急速に破綻することになった〔富永 1987 : 38-39〕。

最終的に、「インディア州」の経営は、利益をもたらさず、ポルトガル政府の財政収入は赤字であった〔カーティン 2002 : 202〕。グジャラートから莫大な関税収入があったにもかかわらず、最終的に、「インディア州」は、1564年には12万5千ルピーの赤字を抱えるまでになったのである〔ピアスン 1984 : 88〕。

やがてポルトガルは、オマーンのイスラム在地勢力の台頭によって東部アフリカ沿岸地域、とくにモンバサからデルガード岬 Delgado までの支配権を失い、ザンベジ川流域を除いて、撤退をせざるをえなくなる。ポルトガル撤退後、東アフリカ沿岸地域経済圏の交易拠点は、ポルトガルによって破壊された都市キルワから、新興都市であるモンバサ、マスカット Masqat、ザンジバルへと移っていく。これは、東アフリカ沿岸地域経済圏における商業ネットワークの変化をも意味していた。オマーンのムスリム在地王権の確立で、マスカットは、ポルトガルの支配からオマーンで確立した王朝の手に移り、グジャラート商人もまた、オマーン王権のもとで経済活動を続けることになる。

2.2 ザンジバルの覇権の確立とグジャラート商人

ポルトガル勢力の環インド洋文明圏からの撤退は、その後のイギリス、オランダ、フランスの新興勢力の台頭を意味していた。とくにイギリスの進出によって、グジャラートのカンバヤに代わり、マドラスやボンベイが新たな交易都市として成立した。ポルトガルとその後のオランダ、イギリス、フランスの環インド洋世界への侵入は、グジャラート商人にとって以下のような意味を持っていた。

17世紀後半から、イギリス、オランダをはじめとする西洋列強のアジアにおける軍事的・経済的な優位性が、グジャラート商人によって結ばれていた自由交易圏として

⁸ ポルトガルのアジア経済の掌握は、東アフリカから東シナ海の日本までの広大な海域に及んでいた。ポルトガル商人は、インド洋から南シナ海までを重要点におさえ、制海権を握り、地域間交易で、主導的な役割を演じた。1590年代、オランダとイギリスが、登場するまで、アジア＝ヨーロッパ間の貿易を独占した。ポルトガルのアジア帝国である、いわゆる「インディア州 Estado da India」を形成したのである。「インディア州」は、領土国家ではなく、要塞をつなぐ貿易航路と、それを保障する海上軍勢力の体系にすぎなかった。〔増田 1998a : 31-32〕。「インディア州」の本部は、形式上リスボンに置かれていたが、実際には、ゴア総督が権限を持っていた。アフリカのザンベジ川流域から中国のマカオに至るまで、40もの要塞やフェイトリアが築かれていた〔カーティン 2002 : 204〕。

の環インド洋文明圏に、新しい海上支配と市場独占の原理を持ち込むことで達成されていった。したがって、その後の環インド洋文明圏の歴史は、グジャラート商人によって形成されていた伝統的な交易ネットワークが分断し、従来の都市機能が破壊したこと、そして新しく成立した港市（マニラ、バタビア、カルカッタ、マドラス、ボンベイなど）と西ヨーロッパ中心の世界システムとが一つの強力な連関軸をもつことで、環インド洋文明圏の内的統合関係が大きく変化させられていく過程でもあった [家島 1992 : 47]。

しかしながら、東アフリカ沿岸地域経済圏の覇権は、ポルトガル、オマーン、イギリスへと移っていくが、これらの覇権の推移の裏には、いずれもグジャラート商人の積極的な関与が見られた。たしかに、インド亜大陸や東アフリカ沿岸地域における拠点貿易港は、グジャラートからボンベイ、キルワからモザンビーク、ザンジバルへと移った。そのこと自体は、ヨーロッパ列強の環インド洋文明圏への侵入の影響によるものである。それにもかかわらず、グジャラート商人は時代の流れをたくみに把握しながら、東アフリカ沿岸地域経済圏で大きな影響力を行使し続けるのである。

グジャラート商人は、ポルトガルが環インド洋から撤退した後、新たなパートナーを探し始めていた。ボンベイへ移住したグジャラート商人は、イギリスのボンベイでの支配体制を支え、シンド *Sindh* に移住したものは、オマーンのブー・サイド朝の東アフリカ沿岸地域経済圏における勢力の拡大を支えた [長島 2000 : 162]。

オマーンでは、イスラムの一派イバード派のヤアーリバ朝が、1620年代に成立した。1650年にヤアーリバ朝は、マスカットをポルトガルから奪還し、その後もポルトガルの拠点を攻撃した。その結果、ポルトガルの東アフリカ沿岸地域の拠点の一つであったモンバサはオマーン勢力の支配下に入り、18世紀初頭、モザンビーク以北の沿岸部地域ではオマーン勢力が強まり、ザンジバルもオマーンの勢力下に入り、東アフリカ沿岸地域経済圏からポルトガル勢力を排除した。

18世紀半ばになると、ヤアーリバ朝の後を受けて、ブー・サイド朝が東アフリカ沿岸地域経済圏で成立した。1806年にサイド・ビン・スルターン *Said bin Sultan* が在位すると、東アフリカ沿岸地域への進出⁹を明確に打ち出し、マスカットと同様にザンジバルも王都とし、オマーン勢力が東アフリカ沿岸地域経済圏で覇権を確立した。

ザンジバルでのサイドの支配は、関税制度を整備することから始まった。サイドは、関税の徴収を商人に委託する「関税徴収請負制度」を導入した。関税徴収請負制度は、東アフリカ沿岸地域一帯で、課税制度の「ムリマ *Mrima*」を整備することから始められた。ムリマとは、対岸の東アフリカ沿岸地域での取引において、サイドが

関税率を独占的に決定する権利のことである。これにより、サイドはアメリカとヨーロッパとの取引を独占し、自らの許可なく取引を行うことを禁止した。さらにサイドは、ザンジバルでの輸出入関税を引き下げ、ヨーロッパ人、アメリカ人貿易商の積極的な誘致を行った [Nicholls 1971 : 80-81]。しかし、この関税徴収請負は、実質上シヴジ族により独占されていった。当初、サイドが整えた関税徴収の請負は、入札によって決定されていたが、1830年代半ばには、グジャラート商人のパニアンが、独占して請け負うことになったのである [鈴木 2008 : 67]。

関税徴収請負には、おもにマスカットからサイドとともに移住したグジャラート商人、とりわけパニアンのシヴジ・トープン *Shivji Topan* が独占的に担うようになっていった。このような状況は、サイドにとって、グジャラートのパニアンが重要な金庫番であったと同時に、サイドの財布がグジャラート商人によって握られていたことを意味している [富永 2001 : 69-83]。サイドは巨額の富を手に入れたが、しかしその富の多くは、彼がパニアンから受け取った請負金であった。彼がパニアンから受け取った請負金は、1837年には15万米ドル、1856年には22万米ドルに上り、彼の年間収入の9割以上に相当する [富永 1990 : 299-230]。

さらに1839年、ザンジバルは、イギリスと通商条約を締結した。折しもこの時期は、1858年の「インド統治改善法」によってイギリスのインド植民地が成立してゆく時代でもあり、グジャラートもまたイギリス支配体制に組み込まれ、グジャラート商人の法的地位は、大英帝国臣民となっていた [富永 2001 : 115 ; 篠田 1994 : 209]。したがって、大英帝国臣民のグジャラート商人の活動は、イギリスの権力を背景に、東アフリカ沿岸地域経済圏において活発化していた。その数は、6,000人にまで上り¹⁰ [Beachey 1995 : 365]、イギリスの報告書によれば、ザンジバルのコージャの数は、1840年頃の165家族から、1870年には703家族の2,558人にまでなり [福田 1997 : 239]、コージャは、東アフリカ沿岸地域経済圏において大きな影響力を有する数にまで増加していた。

19世紀中葉は、イギリスの支配がボンベイとザンジバルで確立されると、東アフリカ沿岸地域とインドの交易の中心は、ザンジバル＝ボンベイ間の直接交易へとシフトした [富永 1996 : 40-41]。図2によると、1850年頃を境に、オマーン王による関税収入は、ザンジバルのそれがマスカットのそれをはるかに凌ぎ、増大していく様子が理解できる。これは、東部アフリカ海洋文明圏における交易の中心が、マスカットからザンジバルへと移行したことを示唆している。

東アフリカ沿岸地域とインドとの交易の主流は、16世紀のポルトガル覇権のもとのマスカットやホルムズ＝グジャラート＝モザンビークから、19世紀前半には、オ

⁹ オマーン王サイド・ビン・スルターンが、東アフリカへ軍事侵攻した背景については [富永 1996 : 38-50] を参照のこと。

¹⁰ イギリス海軍による報告によると、19世紀初頭、グジャラート商人の数は、ごく僅かに過ぎなかった。しかし、1830年代半ばには、200人程度、70年代半ばには、4,000人程度、19世紀末には、8,000人を超えるグジャラート商人が東アフリカ沿岸地域一帯に居住していたという [鈴木 2008 : 62-64]

マーン、イギリス覇権のもとでマスカット＝ボンベイ＝ザンジバルを経て、19世紀中葉以降は、ボンベイ＝ザンジバル間の直接交易へと移行した。

また19世紀中葉以降、コージャは、アメリカへの輸出業においても中心的役割を担っていくことにもなる。マスカットからアメリカには、おもにナツメヤシを、ザンジバルからアメリカには、象牙とクローブを輸出していた。輸入に関しても、アメリカ産綿布の輸入が増加し、その量はインド産綿布をはるかに凌ぐものであった。さらに、コージャの経済活動は活発になっていたのである。

東アフリカ沿岸地域経済圏の覇権は、ポルトガル、オマーン、イギリスへと移った。しかし、これらの覇権の裏には、グジャラート商人の積極的な活動が見られた。たしかに、インド亜大陸や東アフリカ沿岸地域における拠点貿易港は、グジャラートからボンベイ、キルワからモザンビーク、ザンジバルへと移った。そのこと自体は、ヨーロッパ列強の環インド洋文明圏への侵入の影響によるものである。しかし、それにもかかわらず、グジャラート商人は戦略的に時代の流れをたくみに把握しながら、すなわちポルトガルの「インディアナ州」とオマーン王のサイド・ビン・スルターンの歳入を実質的に支え、大英帝国臣民としても東アフリカ沿岸地域経済圏で大きな影響力を行使し続けた。

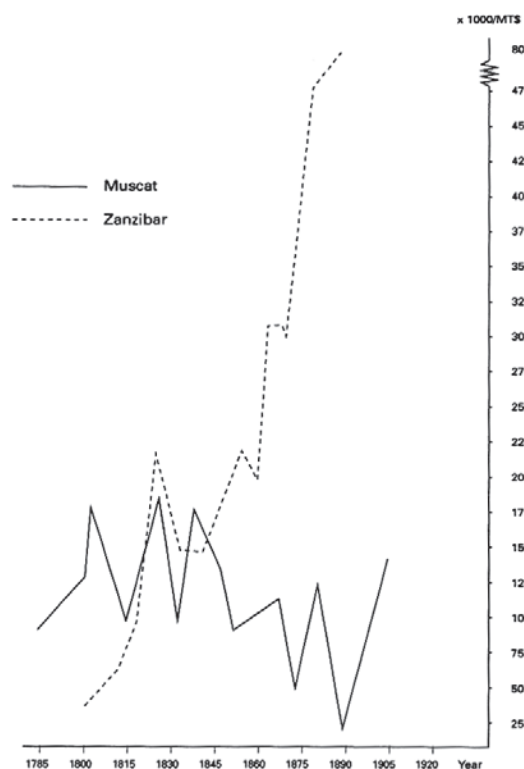


図3 ブー・サイド朝のマスカットおよびザンジバルにおける関税収入額

(出所) Bhacker, M. Reda, *Trade and Empire in Muscat and Zanzibar: Roots of British Domination*, Routledge, London and New York, 1992, p.77.

(注) MTドルとは18世紀から19世紀、中東、アフリカ地域で広く流通していた貨幣でオーストリア銀貨のマリーア・テレージア・ドルのこと。ちなみに1ポンド=4.75 MT\$ [富永 2001: 70] もしくは1 MT\$ = 2.11 ルピー。

2.3 コージャの台頭

19世紀初頭、グジャラート商人の商業ネットワークは、ザンジバル、ナタール Natal、ケープ Cap、モザンビーク Mozambique、インド北西部、マダガスカル北西海岸部から東南アジア、日本までと拡張傾向にあった [Chambell 2005; 大石 2003; 北川 1997; 富永 1996]。ザンジバルにおけるオマーン王の支配体制の確立で、1820年代からパニアンの商業ネットワークは、とくに拡大傾向にあり、ペルシャ湾＝アラビア海＝東アフリカ南部まで拡大した。グジャラート商人は、1860年代には、マダガスカルを含む東アフリカ沿岸地域経済圏から紅海までの広範に、仲介業者 middleman、金融業者や船主として、環インド洋交易を支配する立場にあった。

すでに述べた通り、グジャラート商人は、オマーン王のもと、マスカットですでに存在していたムスリムであるコージャとヒンドゥーであるパニアンとで役割を分担していた。

ザンジバルにおいても、この役割分担は適用されていた。コージャは、オマーン＝アラブ人からクローブ、なつめやし、象牙、奴隷やゴムなどを入手し、それらをパニアンに卸すという役割を担っており、マスカットだけにとどまらず東アフリカ沿岸地域経済圏全域においても、この役割で経済活動に従事していた [富永 1987: 43-47]。ザンジバル在住のコージャは、1840年頃の165家族から1870年まで、703家族の2,558人へと急激に増加し [福田 1997: 239]、東アフリカ沿岸地域経済圏においてその勢力を強めた。

しかしながら、アラビア半島への奴隷輸出に大きく介入していたオマーン＝アラブ人は、ヨーロッパ諸国による相次ぐ奴隷貿易の廃止の余波を受けて、東アフリカ沿岸地域経済圏から退場せざるをえなくなった。東アフリカ沿岸地域経済圏における交易は、グジャラート商人がさらに独占的に支えることになった [Pearson 1998: 242]。次第に、東アフリカ沿岸地域経済圏では、オマーン＝アラブ人が目立たなくなり、グジャラート商人、とくにコージャの商業活動は、現地のアフリカ系、さらにイギリス人などのヨーロッパ人のなかに拡大し、彼/彼女らを顧客にすることで、地域経済のなかで必要不可欠な存在となっていた [大石 2001: 114]。

また、マダガスカルにおいても、同様にグジャラート商人は、ザンジバルとイギリスの威光を背景に、新たな市場開拓と商業ネットワークを拡大させつつあった。その先導的な役割を担っていたのが、港湾代理店の役割を担った「港でのカウンター業務係 Comptoir (仲買人・卸業者)」のコージャであった。

3. マダガスカルにおけるグジャラート商人

18世紀以前におけるグジャラート商人のマダガスカルへの接触について知ることは、ブランシー [Blanchy 1995: 34] も認めているように、以下の一部の報告書等を除いて、難しいことである。

1508年、二人のグジャラート商人が、北西部のメンテ
イラヌ Maintirano にいたことが、ポルトガル人ディエゴ・
ロペス Diego Lopes によって記録されている。彼らグジャ
ラート商人は、1470年頃にカンバヤを出港した船が難破
したときの生存者であった [Grandidier, Alfred et Guillaume
1908 : 411-413]¹¹ という。おそらく、この二人が、19世紀
以前に、ヨーロッパ人によって、記録されているもっとも

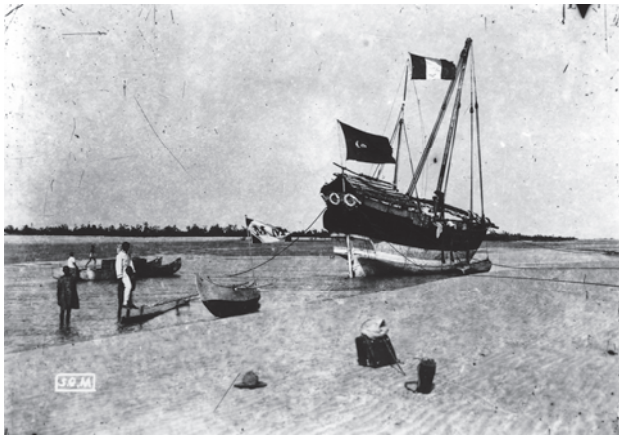


写真4 ムルンダヴァに停泊中の二本マストの木造帆船ブ
ートル (1898年) F.T.M., Antananarivo 所蔵。

(注) アスガール・バルダイ Asgar Barday 氏によると、ブートル
Boutre とは、2本マストのスクナー船のことで、インドから来
る大型船の多くが、ブートルであり、20世紀前半まで、ブートル
は、グジャラート商人にとって重要な交通手段でもあったという。

古いマダガスカルにおけるグジャラート商人であろう。

また、1792年には、グジャラート商人が以下のように
報告されている。マジュンガには、6,000人以上のアラブ
人とインド人のイスラム教徒が、家族とともに生活しており、
宗派別にモスクや学校 (マドラサ Madrasa) などをつ
くっていた。グジャラート商人は、スーラト Surat から毎
年2隻の定期船のブートル Boutre (写真3) で、おもにマ
ダガスカルへ布 (おそらく藍染綿布) を持ってきて、アラ
ブ人の行商人や、フランス人にフヴァ Hova とマダガス
カル語で呼ばれていた、現在の首都であるアンタナナリ
ヴ Antananarivo 周辺の中央高地に住むマレー系のメリナ
人に卸していた。グジャラート商人は、マジュンガでは、
ヨーロッパ人の目にはその活発な経済活動で目立つ存在
だった。この当時、17世紀、セント・オーギュスタン St.
Augustin やセント・マリー島 St. Marie などの海岸部からは、
イギリスのアメリカ植民地向けに奴隷が運搬されており、
大西洋奴隷貿易圏の一部として、重要な拠点になっていた
[下山 1991 : 27-58]。またマジュンガでは、東アフリカへ

向かう西洋諸国の奴隷貿易船が補給のために立ち寄る港
としても繁栄していた [Dumaine 1810 : 27-28] という¹²。

以上に報告されているように、グジャラート商人は、遅
くとも18世紀後半までには、マダガスカル北西部海岸
地方のマジュンガを中心に植民していたことがわかる。な
おグランディディエールが、グジャラート商人から聞いた
話として、毎年グジャラートから2隻の定期船ブートル
がマダガスカルへ来航していたが、1838年に嵐に遭遇
し、一時的にグジャラートからの航路は途切れてしまった
[Grandidier, Alfred et Guillaume 1908 : 563] という。

冒頭で紹介したコージャに語り継がれている移住に関
する話は、遅くとも19世紀中葉にはマダガスカル島北西
海岸地域にまで、グジャラート商人による経済活動の範囲
が拡大していることを意味している。さらに、ザンジバル
在住のコージャが、1840年頃から1870年までの2,558人
へと急激に増加し、東アフリカ沿岸地域経済圏においてそ
の勢力を強めた時期と一致している。

4. むすびにかえて

グジャラート商人による経済活動は、19世紀以降東ア
フリカ沿岸地域経済圏において、その勢力が衰退すること
はなかった。東アフリカ=インド間の交易の主流は、16
世紀のポルトガル覇権のもとで、マスカット、ホルムズ=
グジャラート=モザンビークから、19世紀前半には、オ
マーンとその後のイギリス覇権のもとで、マスカット=ボ
ンベイ=ザンジバルを経て、19世紀中葉以降は、ボンベ
イ=ザンジバル間の直接交易へと移行した。それに伴い、
東アフリカ沿岸地域経済圏の覇権は、ポルトガル、オマ
ーン、イギリスへと移った。しかし、それにもかかわらず、
グジャラート商人は、時代の流れをたくみに把握しながら、
東アフリカ沿岸地域経済圏において、大きな影響力を
行使し続けた。その原因として、17世紀のグジャラート
では、世界商品となった藍染綿布が分業生産されており、
その商品を、まさに世界商品とするための交易を担う商人
が、存在していたということが一つの大きな理由として挙
げられる。

グジャラート商人が、環インド洋世界各地で世界商品の
藍染綿布の販売を可能にしたのは、17世紀のグジャラ
ートでは商品経済が発展しており、グジャラート商人による
商業・金融組織も確立されており、遠隔地送金的手段とし
て手形制度が、すでに発達していたからである。

さらに、グジャラート商人であるヒンドゥーとムスリム
の役割分担が確立していたことも重要な要因であった。そ

¹¹ アルフレッド・グランディディエール (1836~1921) は、フランス人の地理学者、文化人類学者、歴史学者である。後
に、パリの地理学協会 la Société de Géographi の代表に就任する。マダガスカルには、1865年初訪問。その後1869年
から1870年まで、二回にわたりマダガスカルを訪問した。現在でも、19世紀のマダガスカルの様子を知るための貴重な
資料として、彼の著書もしくは報告書は、しばしば引用される。なお、グイラウム・グランディディエール Guillaume
Grandidier (1873~1957) は、彼の息子である [Ranivoson 2005 : 79-81]。

¹² ドゥメンヌの文献を入手できなかった。そこで本稿では、グランディディエール [Grandidier, Alfred et Guillaume 1908 :
658-659] の引用文からの引用である。またブランシー [Blanchy 53-54] も同じように、グランディディエールから引用
している。

の役割分担を支えていたのは、ジャーティというインド独特の職業集団の存在であった。ブートルを所有し、商業・金融部門を担当していたのは、おもに、バニアンといわれていたヒンドゥー¹³あり、コージャは、オマーン＝アラブ人と組んでアフリカ大陸の内部との取引に介入していた。グジャラート商人は、仲買人・卸業者＝コージャ、輸出入業者＝バニアンとの協力関係によって成立していたのである。また、コージャは、金融業者でもあったバニアンから融資された前借金を携え、港で商品の仕入れと卸業に従事していた。コージャは、オマーン＝アラブ人から象牙、奴隷やゴムを入手し、バニアンに卸しており、東アフリカ沿岸地域経済圏において重要な役割を担っていた。コージャは、東アフリカ沿岸地域経済圏において、まさに「港でのカウンター業務係」として活躍していたのである。

史料と文献

未公刊史料

- ・ *Guides Annulaires de Madagascar* 1908.
- ・ ロッシャン・ジャミール氏による聞き取りより（2007年8月18日、アンタナナリヴ市内のマドラサの校長室にて）

公刊史料

- ・ Dumaine, Idée de la côte orientale de Madagascar depuis Ancouala au nord jusqu'à Moroundava en 1792, *Annales des Voyages*, t. X I (ou *Annales de Malte-Brun*, t. II) , 1810.
- ・ Grandidier, Alfred and Guillaume, *Histoire Physique, Naturelle et Politique de Madagascar*, Vol. IV : *Ethnographi de Madagascar* , t. I : *Les Habitants de Madagascar*, Deuxième Partie: *Les Etrangers*, Paris, Imprimerie Nationale, 1908.

欧語文献

- ・ Abu-Lughod, Janet L, *Before European Hegemony : the world system A.D. 1250-1350*, Oxford University Press, 1989 (佐藤次高、ス波義信、高山博、三浦徹訳『ヨーロッパ覇権以前（上・下）』岩波書店、2001年）。
- ・ Alpers, A. Edward, Gujarat and the Trade of East Africa, c. 1500-1800, *The International Journal of African Historical Studies*, Vol.9 No.1, 1976, pp.22-44.
- ・ Beachey, R. W., *A History of East Africa, 1592-1902*, London, 1995.
- ・ Bhacker, M. Reda, *Trade and Empire in Muscat and Zanzibar : Roots of British Domination*, Routledge, London and New York, 1992.
- ・ Bouchon, G. and Lombard, D., The Indian Ocean in the Fifteenth Century, in Ashin Das Gupta and Pearson (eds.) *India and the Indian Ocean 1500-1800*, Oxford University Press, 1987, pp.46-69.
- ・ Blanchy, Sophie, *Karana et Banians : Les Communautés Commerçantes d'Origine Indienne à Madagascar*, L'Harmattan, 1995.

- ・ Champbell, Gwyn, *An Economic History of Imperial Madagascar, 1750-1895 : The Raise and Fall on an Island Empire*, Cambridge University Press, 2005.
- ・ Chaudhuri, K.-N., *Asia before Europe : Economy and Civilization of the Indian Ocean from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge University Press, 1990.
- ・ Dez, Jacques, De l'influence arabe à Madagascar à l'aide de faits de linguistique, *Taloha 2 : Arabes et Islamisés à Madagascar et dans l'Océan Indien*, Revue de l'Institut de Civilisations Musée d'Art et d'Archéologie de l'Université d'Antananarivo, 1994, pp.1-38.
- ・ Landen, Robert, *Oman since 1856 : Disruptive Modernization in a Traditional Arab Society*, Princeton University Press, 1967.
- ・ Nicholls, C. S., *The Swahili Coast : Politics, Diplomacy and Trade on the East African Littoral 1798-1856*, Africana Publishing Corporation, New York, 1971.
- ・ Newitt, M. D. D., East Africa and Indian Trade Ocean: 1500-1800, in Ashin Das Gupta and Pearson (eds.) *India and the Indian Ocean 1500-1800*, Oxford University Press, 1987, pp. 201-223.
- ・ Pearson, M.N., *Merchants and Rulers in Gujarat*, University of California, 1976 (生田滋訳『ポルトガルとインドー中世グジャラートの商人と支配者ー』岩波書店、1984年）。
- ・ Pearson, M. N., Indians in East Africa : The Early Modern Period, in Mukherjee and Subramanian (eds.) *Politics and Trade in the Indian Ocean World : Essays in Honour of Ashin Das Gupta*, pp.227-249, 1998.
- ・ Ranaivoson, Dominique, *Madagascar : Dictionnaire des Personnalités Historiques*, Antananarivo, 2005.
- ・ Razafimandimamby, Noro, Communauté Indienne: 0.2% de la Population 15% du PIB, *Révue de l'Océan Indien*, juin 1999, pp.25-33.
- ・ Robinson, David, *Muslim Societies in African History*, Cambridge University Press, 2004.
- ・ Toussaint, Auguste, *Histoire de l'Océan Indien*, Press Universitaires de France, 1961.
- ・ Vérin, Pierre, Note sur Le Commerce, Economique des Cotes Nord-Ouest de Madagascar au 19e Siècle, *Révue Economique de Madagascar* n°6, 1971, pp.137-145.

日本語文献

- ・ 藍澤光晴「マダガスカル植民地化と十二イマームシーア派コージャの経済活動」日本オーラル・ヒストリー学会『日本オーラル・ヒストリー研究』第12号、2016年、pp.223-237.
- ・ 藍澤光晴「マダガスカルにおける十二イマームシーア派コージャ（Khoja Shia Ithana-Asheri）の移住と経済活動」日本移民学会『日本移民年報』第16号、2010年、pp.135-148.
- ・ ウォーラーステイン, I., 川北稔訳『近代世界システム』II、

¹³ 1891年、グジャラートのスーラトの住民の大部分がバニアンであるとされ、グジャラート地方のヒンドゥーの90%以上がバニアンに属していたといわれている [長島 1982: 86]。

岩波書店、1981.

- ・大石高志「南アフリカにおける経済自由化とマイノリティ・ビジネス・インド・ムスリム系衣料製造販売業者の事例を中心にして」南埜猛、関口真理子、澤宗則編『越境する南アジア系移民－ホスト社会とのかかわり－』文部省科学研究費・特定領域研究（A）「南アジア世界の構造変動とネットワーク」2001年、pp.43-58.
- ・大石高志「南アフリカのインド系移民－商人・移民のネットワークと植民地体制との交差と相違－」秋田茂、水島司編『現代南アジア⑥世界システムとネットワーク』2003年、東京大学出版会、pp.299-325.
- ・北川勝彦「日本－南アフリカ通商関係史研究」『日文研叢書13』国際日本文化研究センター、1997年.
- ・小谷汪之「17・18世紀グジャラートの政治経済」松井透・山崎利男編『インド史における土地制度と権力構造』東京大学出版会、1969年、pp.197-226.
- ・カーティン,P., 田村愛理、中堂幸政、山影進訳『異文化間交易の世界史』NTT出版、2002年.
- ・下山晃「大西洋奴隷交易圏とイギリス東インド会社」浅羽良昌編『経済史－西と東－』泉文堂、1991年、pp. 27-58.
- ・篠田隆「インド・グジャラートの宗派・カースト構成－1931年国勢調査の分析－」『大東文化大学紀要(社会科学)』第32巻、1994年、pp.201-232.
- ・鈴木英明「マドラサは一着の服とコップひとつで旅立った－スワヒリ世界のバティヤー商人たち－」『インド洋海域世界一人とモノの移動－(自然と文化そしてことばNo.4)』葫蘆社、2008年.
- ・富永智津子「ザンジバル社会とクローブ生産－アラブ支配からイギリス支配へ－」山田秀雄編『イギリス帝国経済の構造』新評論、1986年、pp.353-403.
- ・富永智津子「旅と商人と－インド洋世界から－」『歴史評論』第445号、1987年5月号、校倉書房、pp.39-49.
- ・富永智津子「東部アフリカをめぐる王権と商業－ザンジバルの笛－」『移動と交流－シリーズ世界史への問い3－』岩波書店、1990年、pp.287-313.
- ・富永智津子「インド洋海域における東部アフリカ沿岸地域－19世紀スワヒリ世界の展開－」歴史学研究会『歴史学研究』No.691、青木書店、1996年11月号、pp.38-50.
- ・富永智津子『ザンジバルの笛－東アフリカ・スワヒリ世界の歴史と文化－』未来社、2001年.
- ・増田義郎「ポルトガルとアジア（2）」亜細亜大学『国際関係紀要』第9巻第1,2合併号、1998、pp.475-495.
- ・マトベイエフ, V. V., 宇佐美久美子訳「スワヒリ文明の発展」『ユネスコ・アフリカの歴史』第4巻（下）、pp.662-694、1992年.
- ・長島弘「16世紀インド海上貿易の構造－主要貿易品の分析を中心として－」東洋史研究会『東洋史研究』第35巻第2号、1976年、pp.1-38.
- ・長島弘「ムガル帝国下のバニヤ商人－スーラト市の場合－」東洋史研究会『東洋史研究』第40巻第4号、1982年、pp.85-118.
- ・長島弘「16、17世紀グジャラートにおける海上貿易と国家－M.N. ピアソン氏の所説をめぐって－」長崎県立大学『国際経済大学論集』第18巻第1号、1984年、pp.87-117.
- ・長島弘「インド洋とインド商人」岩波講座世界史14『イスラーム・環インド洋世界』岩波書店、2000年、pp.141-165.
- ・ピレス, トメ, 生田滋『東方諸国記〈大航海時代叢書〉』岩波書店、1966年.
- ・フランク, A. G., 山下範久訳『リオリエントーアジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店、2000年.
- ・福田安志「インド洋交渉史」宮本正興、松田素二編『新書アフリカ史』講談社現代新書、1997年、pp.210-248.
- ・福田安志「ペルシア湾と紅海の間」『岩波講座世界歴史14－イスラーム・環インド洋世界－』岩波書店、2000年、pp.115-140.
- ・家島彦一「ダウ船とインド洋海域世界」『生活の技術生産の技術(シリーズ世界史への問い2)』岩波書店、1990年、pp.105-128.
- ・家島彦一「インド洋海域の交易都市ネットワーク」『学術月報』第45巻第1号、1992年、pp.40-47.
- ・家島彦一『海が創る文明－インド洋世界の歴史－』朝日新聞社、1993年.
- ・家島彦一『海域から見た歴史－インド洋と地中海を結ぶ交流史－』名古屋大学出版会、2006年.
- ・吉国恒雄『グレートジンバブウェー－東南アフリカの歴史世界－』講談社現代新書、1999年.